

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 20 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25360044

研究課題名(和文) 近世の性・生殖、いのちと「家族計画」

研究課題名(英文) Sex/reproduction, life and "family planning" in early modern Japan

研究代表者

沢山 美果子 (SAWAYAMA, MIKAKO)

岡山大学・社会文化科学研究科・研究員

研究者番号：10154155

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、近世社会の人々は性と生殖とどう向き合ったのか、その具体相を、身分、階層の違いや、男と女の関係、いのちをめぐる観念、性と生殖をコントロールする方法も含めて探ることにある。それは近世の夫婦、家族には、家族の未来のために性と生殖をコントロールする「家族計画」の意識はあったのか、近世社会の性と生殖、いのちをめぐる問題に接近する試みでもあった。その結果、近世後期に流布する民間療法や人々が残した日記には性と生殖をコントロールする試みがみられるなど、家の維持・存続を意識した出生コントロールという「家族計画」の萌芽がみられることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：One of the purposes of the research was to clarify how people in early modern Japan faced and addressed uncontrollable inner nature: sex and reproduction. I wanted to know if there was any class difference in ways of coping with this issue. Examples were explored from both samurai and farmer classes to examine the relationship between men and women, the notion about the life of fetus and infants, life culture including methods of controlling sex and reproduction. I was curious to know if married couples and families in early modern Japan were conscious about "family planning" for the future of their families. The research revealed that folk remedies and diaries that people kept described contraception and other attempts of controlling sex and reproduction. In that it clearly indicates an initial sign of their consciousness for "family planning" which would assure them of the maintenance of the family lines.

研究分野：ジェンダー

キーワード：近世 性 生殖 いのち 身体 家族計画

1. 研究開始当初の背景

(1) 1990年代以降、ジェンダーの視点が近世史研究に取り入れられ、生命の再生産や男と女の関係を視野に入れて近世社会の歴史性を明らかにすることが課題となるなかで、ジェンダーの根幹にかかわる問題として性、生殖というテーマが浮上してきた。さらに2000年以降は、いのちの視座から近世史像の再構築を試みる研究が登場してきている。その代表的な研究に、塚本学『生きることの近世史』(2001年)、倉地克直『徳川社会のゆらぎ』(2008年)がある。これらの研究では、近世の人々のいのちを守る砦としての「家」の維持・存続との緊張関係のなかでの女の出産や子どものいのちをめぐる選択といった視点から、近世社会に生きた一人ひとりのいのちの側から歴史像を描く試みがなされつつある。

(2) 本研究の目指すところも、いのちの視座から近世史像を再構築し、「いのちのジェンダー史」を切り拓く手がかりを得ることにある。研究代表者はこれまで、出産や女の身体に焦点をあて性と生殖の問題を追究し、さらに生殖の最終局面にある捨て子に焦点を当て、子どものいのちの問題へと研究を進めてきた。その成果は、『出産と身体の近世』(1998年)、『性と生殖の近世』(2005年)、『江戸の捨て子たち その肖像』(2008年)という三冊の著書として刊行されている。この性と生殖から子どものいのちへという研究プロセスのなかで、性と生殖と子どものいのちを絡めて考えたときに浮かび上がってきたのが、近世社会における女の身体と子どものいのちの問題を、いのちの環境との関連で探るという課題である。

そのために平成22～24年度の基盤研究(C)「乳」からみた近世社会の女の身体・子どものいのち』では、女の身体と子どものいのちの結節点にあり、人々のネットワークや生殖パターンへの具体的接近が可能になる「乳」の問題に焦点を当て、人々はどうのようによいのちを繋ごうとしてきたのか、近世社会のいのちの環境を都市と農村のネットワークも視野に入れて明らかにした。それは、出産の社会史では出産までの問題を、子育ての社会史では産後の子どもの問題を扱うという研究上の分離を克服し、両者をいのちの視点から繋ぐ試みでもあった。これらの研究は、いのちといのちをめぐる環境、そして身体の内なる自然である性と生殖に人々はどう向きあいいのちを繋いできたのかを探る試みと言える。

本研究では、これらの成果を踏まえ、さらに近世社会の性・生殖といのちの問題を「家族計画」を軸に多角的に探る。(3)性と生殖をめぐる近現代史研究のもっとも新しい成果として、日本を対象とした荻野美穂の『「家族計画」への道 近代日本の生殖をめぐる政治』(2008年)、イギリスを対象とした松塚俊三の「戦間期イギリス労働者階級の性の文

化」「セクシュアルリテラシー 戦間期イギリス労働者階級と性」(2010年)がある。荻野は、具体的な生殖コントロール法や当事者の声に着目し、墮胎・中絶と避妊の関係性を軸に、女たちの産まないことへの態度が一枚岩ではないこと、女性たちが胎児は人間、命と捉える一方で、中絶は手放せない、手放さないという地点にたどりつくまでの矛盾に満ちたプロセスをたどる。本研究では、ここで荻野が示した近世の墮胎から近現代の避妊へとという枠組みを近世史の側から問い直すことも、一つの課題とする。

他方、松塚は、親世代が味わった大家族の苦労を身にしみて体験したイギリス労働者階級の「家族制限」は計画、「プラン」というほど確固たるものではないものの、大家族を避けるために何らかの手段が講じられねばならないとする「猿とした期待を表」していたとする。

(4)本研究では、これらの研究動向を踏まえ、ジェンダーといのちの視座から近世史像の再構築を図ることを意図し、研究代表者が今まで蓄積してきた性と生殖をめぐる研究成果を踏まえ、近世社会の性と生殖、いのちの問題を、「家族計画」を軸に多角的に探ることとした。

2. 研究の目的

(1)本研究の目的は、以上のように、ジェンダー史のジェンダーの視点、そしていのちの視座から近世史像の再構築を図る近世史研究の成果、さらに最近の性と生殖をめぐる日本近現代史、イギリス史の研究動向を踏まえ、また今まで蓄積してきた性と生殖、いのちをめぐる自らの研究成果を踏まえて導きだされた。

本研究では、特に、村、町、家などの社会的諸関係を視野に収めつつ、近世の性・生殖、いのちの問題について、人々のいのちの保障の基盤である「家」の維持・存続戦略と関わらせ、具体的なフィールドを設定して検討する。その際、性と生殖をコントロールする性の禁忌をめぐる民間の写本や暦、民間療法を記した写本に記された性と生殖をめぐる処方、そして「家」と性の重層的なあり方に迫る手がかりとなる武士、町人の日記などを用いる。このように地域と場を設定し、性をめぐる民俗や民間医療といった性の文化も含め、性・生殖といのちの問題を具体的に探る試みは、いまだ未開拓と言える。

(2)近世社会の人々は性と生殖という制御しがたい身体の内なる自然とどう向き合ったのか、武士、農民といった身分階層による違いや、そこでの男と女の関係、胎児・赤子のいのちをめぐる観念、さらに避妊も含めた性と生殖をコントロールする方法や民間療法などの生活文化も含めて探る。特に、近世の夫婦、家族には、家族の未来のために性と生殖をコントロールすることで、いのちを繋ぐという「家族計画」意識はあったのか、「家族

計画」を軸に近代への展開も視野に入れ、近世社会の性と生殖、いのちをめぐる問題に多面的に接近する。

3. 研究の方法

(1)本研究の位置づけを明確にするために、近世の性と生殖をめぐる文献収集、とくに養生論、民間療法、遊女の性と生殖をめぐる文献を収集するとともに、近年の性と生殖をめぐる研究成果を都市史、身分社会論なども含め幅広く収集し、その分析視角や問題設定、枠組に学び、課題と方法の明確化をはかる。

(2)そのうえで、具体的なフィールドに即し、性と生殖をめぐる史料の収集、読解、分析をおこなうとともに、すでに刊行されている八戸藩の上層武士の日記である『遠山家日記』、読解が終わっている、西日本の松江藩の町人の日記「おぼえ日記」にみる性と生殖をめぐる記述の分析をすすめる。

さらに性をめぐる禁忌を記した民俗史料、性をめぐる民間療法の収集を行い、人々の間に流布した避妊、性生活をめぐる禁忌などの生活文化、民間療法の中に、近世の人々の性と生殖コントロールの具体相と、性と生殖をめぐる希望や不安を探る。

(3)近世の性の問題をめぐって近年遊女研究がすすんでいるが、遊女の身体、性意識をめぐる分析は、十分にはなされていない。そこで遊所に関する史料の収集を文学作品も含めておこない、性と生殖の現場である「家」の問題を、もう一つの場である「遊所」の問題と関係づけて考え、近世の性と生殖を問題とする際の枠組みと切り口を探る。

(4)本研究の主たる対象は近世であるが、さらに近世から近代への展開の見通しを探ることで、近世には「家族計画」への萌芽があったのかを多面的に探る。

4. 研究成果

(1)性と生殖、いのちの問題に接近するための史料読解をめぐって『歴史学研究』に「女たちの声を聴く」をまとめ、歴史の表面にあらわれにくい女たちの声や性と生殖をめぐる営みをめぐって、どのように史料を発掘し史料読解を行うか、本研究の方法に関わる問題をまとめた。

(2)性と生殖、出生コントロール、いのちをめぐる、ウイーン大学で開催されたヨーロッパ社会史学会で、「徳川日本の胎児と赤子観」を報告した。ここでは、とくに日本の墮胎・間引き、捨て子といった「家」の維持・存続と関わってなされた出生コントロールの諸相と、そこでの胎児観、赤子観について報告したが、他のヨーロッパ諸国との比較のなかで国際比較の視点を得た。

(3)いのちへの視点をめぐって、近年の近世史研究のいのちの視点から近世史像の再構築をはかる先行研究を整理するとともに、では、どのように近世社会に生きた一人ひとりの子どもや女の側に視点を定め、いのちを繋

ぐ営みの具体相に接近するのか、その見通しを、ヨーロッパ史との比較の視点で探り「日本近世公権力による人口と「いのち」への介入」にまとめた。

(3)性と生殖、家族計画をめぐる国際比較の視点から『叢書・比較教育社会史 保護と遺棄の子ども史』の編集を行い、その序章にあたる「保護と遺棄の問題水域と可能性」では、先行研究の整理と論点の提示を行い、子どもの保護と遺棄という視点から、性と生殖をめぐる問題の整理を行った。ここでは、近世の「遺棄」は捨て子のみならず、墮胎・間引きなど様々な形態をとったが、その背後には、「子どものいのちの序列化と選別」があり、とくに近世社会では「家」の維持・存続と関わって、労働能力や生殖能力において劣るとされた胎児・赤子を排除することで、家族の未来を確保するという選択がなされたことを明らかとした。

また国際比較の視点から、性と生殖をめぐる問題に接近するには、遺棄する社会的弱者と保護する政治権力という二項対立的枠組みでは不十分であり、村、町の共同体、世間という公共空間の歴史的変容のプロセスなども視野に入れる必要があることも提起した。

(4)本研究の主たる対象は近世であるが、近世から近代へ、そして近代家族への展開を探るため、『近代家族と子育て』では、近代家族の、子どもたちに学歴を付けるために、子どもの数を限るという教育家族としての「家族計画」と、母性愛に価値を置く「育児」の諸相を明らかにし、さらに「『産み育てること』の近代」では、近代国家と社会の枠組みが形成される1880年代への転換期に焦点を当て、地域と家族に生きた人々の側から「産み育てること」の近代とは何であったのかを問うた。ここでは、とくに性と生殖をめぐる近世から近代への重層的な展開の諸相を追うことを課題とした。近代以降、女性たちは、衛生や医療、養育や教育に関する新たな情報を得ることで、出産による危険を回避し、子どものいのちを守ることが出来る確率が高まるなど、「家族計画」が可能になる条件が出来ていく一方で、近世以来の「産み育てること」の紐帯は重層的に残存していたこと、しかし、1910~20年代に都市に新しく形成された新中間層の近代家族では、その営みは、多様な紐帯から切り離された閉鎖的な営みとなるという見通しを示し、一つの地域に生きた人々の側から、「家族計画」の視点も入れて近世から近代への展開の重層性を明らかにした。

(5)本研究全体を通して明らかになったことを「近世の性」『岩波講座 日本歴史 第14巻 近世5』にまとめ、「家族」と「遊所」という性と生殖の現場に即し、女と男が抱えた性と生殖をめぐる矛盾や葛藤を社会的関係のなかで読み解くことを通して近世の性と生殖の歴史的特質を探った。その際、特に、

人々の性と生殖をめぐる選択、当事者の語りから浮かびあがる「家」と「遊所」での性と生殖、性をめぐる禁忌に垣間見える性と生殖への人々の不安や希望などを明らかにすることで、近世の人々の性と生殖をめぐる具体相と、そこに刻み込まれた歴史的特質とはどのようなものだったのか、当事者の側から、その身体の経験に即し、女と男の関係をはじめとする社会的関係の中で探った。

その中で、近世社会には萌芽的ではあるにせよ、「家」の維持・存続という家族の未来のために、性と生殖をコントロールする「家族計画」の萌芽がみられることが明らかとなった。また、人々のいのちを繋ぐ営みの中核に位置する性と生殖に「家族計画」という視点から焦点をあてることは、近世から近代への家族の性格の歴史的展開を内在的に明らかにするうえでも、重要な切り口となることの見通しを得ることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

沢山美果子、女たちの声を聴く 近世日本の妊娠、出産をめぐる史料読解の試み、歴史学研究、査読有、912号、2013、27 - 38、72

〔学会発表〕(計1件)

沢山美果子、Concept of Fetuses and infants in the Tokugawa Japan、ヨーロッパ社会史学会、2014年4月26日、ウイーン大学(オーストリア)

〔図書〕(計6件)

沢山美果子 他、有志舎、講座 明治維新9 明治維新と女性、2015、205 - 237

沢山美果子 他、岩波書店、岩波講座 日本歴史 第14巻 近世5、2015、217 - 249

沢山美果子 他、昭和堂、叢書・比較教育社会史 保護と遺棄の子ども史、2014、25 - 45、67 - 99

沢山美果子 他、吉川弘文館、環境の日本史4、2014、98 - 127

沢山美果子、吉川弘分館、近代家族と子育て、2013、269

沢山美果子 他、昭和堂、叢書・比較教育社会史 福祉国家と教育 比較教育社会史の新たな展開に向けて、2013、98 - 113

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：

番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

沢山 美果子 (SAWAYAMA, Mikako)
岡山大学・大学院社会文化科学研究科・客員研究員
研究者番号：10154155

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：